特249
938

特249
938

傾城戀飛脚

傾城戀飛脚

目次

新口村の段……一―三
同　註釋……三一―一〇
○傾城戀飛脚筋書……一―一〇

解説附
稽古本 義太夫名曲全集

傾城戀飛脚

新口村の段

『節季候たい〳〵、たい〳〵は節季候、おめでたいは節季候』
『通らしやれ〳〵、親方衆と逢ふてこちとらは水呑百姓、こな
た衆にやる米はないわいの』とつことに云れ、

『こりやひどい、いかさま貰ふ節季候より内の様子はせく候』
と、逝れば女房は絲ぐるま、正月迄は休まそと、納戸へ取込みお
うへの塵、掃出す表へ、
『てい古手買紙屑、お内儀様、紙屑はないかな』
『オヽいやな人じやわいの、京や大阪と違ふて在所に紙屑は
ない物じや、勝手しらぬ人じやそふな、町方へ出て買つしやれ、
あほうな人』と笑はれて、つぶやきながら見廻し〳〵歸る程
なく同行二人、順禮歌ふだらくや岸打つ波は三熊野の那智の
おやまの詮議とは、人目にそれと白木綿、禪衣かけた順禮姿、
『お嚊様火を一ツ貸つしやりませ、爰は何といふ所かな』

『爰は大和の新口村、煙草の火は出しませぬ、手の内も法度で
ございす』
『アヽけんどんな在所だな』と、家内をきよろ〳〵ねめ廻し、
次の村へと出て行く。
『ほんにけふ程うさんらしい者のたんとくる日はない、納戸
這入も成るまい、ドリヤ夕飯のこしらへ』と竈の前に差かゝ
る。落人の爲かや今は冬がれて、すゝき尾花はなけれ共、世を
忍ぶ身の跡や先、人目を包む頰かぶり、隱せど色香梅川が馴ぬ
旅路を忠兵衛が、いたはる身さへ雪風に、凍る手先懷に、あたゝ
められつ溫めつ、石原道を足曳の、大和は爰ぞ故郷の、新口村に

着きけるが、

『コレ爰はわしが生れ在所、四五丁行けば實の親孫右衛門の所なれど、不通といひ繼母なり、殊に今の身の上をお目にかけるは大きな不孝、此わらぶきは忠三郎といふて親達の家來も同然、マア〳〵爰へ』と門の口、『忠三殿内にか、ア、久しう逢ませぬ』と、つゝと這入れば女房は、

『アノこちのは今庄屋殿へ、どこからござんして何の用、わしや藪際の治郎兵衛後家の媒妁で、近い頃爰へ來た故、前方の近附は知ませぬが、もし大阪の衆じやないか、こちの親方孫右衛門様の息子殿、大阪へ養子に行て、傾城とやらいふ物をたんと買て、人の金を盗み、其の傾せんを手にさげて走つたとやらすべつたとやらで、代官所からきつい詮議、孫右衛門様は久離切てお上の構ひはなけれど、血を分た親子なれば、いとしや年寄てきつい案じ、こちの人も馴染故、もし此あたりうろたへて、見付られはさしやれぬかといかい氣苦勞、庄屋殿から呼にはくる、ヤ寄合じやと、節季師走に爰らあたりは傾せん事でにへかへる、ア、うたての傾せんや』と、しらねば遠慮もなかりけり。

二人はハッと胸に釘、打點頭いて、

『成程〳〵、大阪でも其評判、わしらは女夫づれで年籠の參宮、なつかしさに寄りましたが、立ながらあふて逝たい、大阪者と

云ずにちよつと呼で來て下されぬか』

『オヽ夫は安い事、一かへり行てきませふが、京のお寺が鎌田村の道場へお下り、先から直に參られたも知れまい、夫ではよつぽどわしが戻りも遲い、コレ女中樣、飯がしかけて有る程に出來損なはぬ樣に差くべて下んせや』と、禪はづして出て行く。跡は門口はたとしめ、鏁かけてうつとりと暫し詞もなかりしが、

『コレ忠兵衛樣、ほんに爰は劍の中、斯して居ても大事ないかえ』

『ァヽいや〳〵男氣な忠三郎、賴んで今夜は爰に泊り、死る共故郷の土、生の母の墓所、いつしよにうづまれてそなたにも、嫁姑と引合せ、未來の對面さしたい』と、おろ〳〵涙梅川も、

『それは嬉しうござんせふ、さりながら私がとゝ樣かゝ樣は、京の六條數珠屋町、定めて此間詮議に合て居さんせふ、かゝ樣は眩暈持、若もの事は有まいかと、我身のうへより案じられ、今一度京の二親に一目あふて死たふござんす』

『オヽ道理じやく、わしもそなたの親達に聟じやといふて逢もしたし、恩の有る養子親、妙閑樣や云號のおすはへも不埒の詫、そなたの兄忠兵衛殿の志も無にした斷り、今一度しみじみあひたい』と、人目なければないじやくり、わたしもたんと

恩の有る兄さんが猶戀しいと、互に手を取り抱き合ひ、涙のあられはら〳〵と袖にあまりて窓を打つ。

『ハア雪が降るそふな』と、奥の一間は西受の、反古障子を細目に明け、見やる野風の畠道、うしろしぶきの吹雪には、かたげて急ぐ阿彌陀傘、道場參りぞつゞきける。

『アレありや皆在所のしつた衆、先なは樋の口の水右衛門、ひどい呑人じやぞい。其次は荷持瘤の傳が婆、こりや又村一番の茶飲じや、そこへくる置頭巾は、大貧乏で有たが、年貢に詰つて娘を京の嶋原へ賣つて、よい客に請出され、金持の奥様に成て、聟の影で田も五丁、藏も二ケ所の俄分限、同じ女郎受出しても、わしはそなたの親達に憂目をかけるが口惜いわいの』

『エ、愚痴な、モウそんな事いふて下さんすな〳〵』

『アノ親仁は、弦かけの藤治兵衛、八十八で一升の飯を殘さぬ達者もの、今年はちやうど錢百じや。其跡に仔細らしい坊主は鍼立の道庵、あいつが鍼で母者人を立殺した、思へば〳〵親の敵』

『ア、もふよいわいな、今腹たてゝ何の役に立たぬ事』

『ア、アレ〳〵あそこへ見へるが親父様、此世のわかれ御暇乞、せめて餘所ながらお顔なりと拜まふと、はる〳〵と爰迄來た念願が叶ふたか、ア、有がたい〳〵』

『エ、〳〵あの縹子の肩衣が孫右衛門様かいな、ほんに親子はあらそはれぬ、目元なら鼻筋なら、お前によふ似た事わいな』

『サア夫程よふ似た親と子が詞さへも得かはさぬは何とした身の因果、ア、お年も寄り、足もとも弱つた、是が今生のおいとま乞でございます』と、手を合すれば梅川は、今がお顔の見初の見納め、『私は嫁でございんする、夫婦は今をもしれぬ命、百年の御壽命すぎて後、未來で孝行いたしましよ』と、口の内にて獨言、夫婦諸共手を合せ、兎かう涙にむせび居る。孫右衛門は老足の休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の薄氷、すべるを留る高足駄、鼻緒は切れて横様に、どふと轉べばなむ三と、忠兵衛もがけど出られぬ身、梅川あわて走り出で、抱起しつ裾しぼり、

『申し〳〵、どこもいたみは致しませぬかへ、お年寄のあぶない事、お足も洗ひはな緒もすげて上げませう、マア〳〵こちへ』と手を引て内へ伴ひ揚り口腰膝撫ていたはれば孫右衛門は氣の毒さ、

『ア、戴きます〳〵、どなたか知ぬが忝ない、お蔭でけがも致しませなんだ、ア、若い女中のおやさしい年寄と思し召て、嫁子もならぬ御介抱、もふ〳〵手を洗はしやつてくださりませ〳〵、幸ひ庭に藁は澤山、鼻緒はわしがすげます』と、懷捜して

取出す塵紙、

『ア申、爰によい紙がござんす、小搓捻つて上げましよ』と延べ紙引さく其手元、ふしぎそふに打守り、

『爰らあたりに見馴ぬ女中、マアこな様はどなたなれば此やうに念比にして下さります』と、顔つれ〳〵とながむれば、梅川いとゞ胸つぼらしく、

『ハイわたしは旅の者、私が舅の親父様、丁どお前の年榮で、恰好も生寫し、外の人にする奉公とはさら〳〵もつて存じませぬ、お年寄た舅御の臥腦の抱かゝへ、孝行は嫁の役御用に立て嬉しい物、嘸連合は飛立つ様にござりましよ、其紙と此紙とかへて私が申請け、連合の肌に付させて、爺御に似た親父様の筐にさせたふござんす』と、塵紙禮におし包む、涙にそれとはしられけり。詞の端に孫右衛門、扨はさうかと恩愛の盡ぬ涙を押隱し、

『フウこなたの舅に此親仁が似たといふての孝行か、ヱヽ、嬉しうござる、が腹が立ちます、わしも年たけた躰めを様子有て久離切り、大阪へ養子にやつたが、傾城といふ魔がさして人の金を盗んだとやら、あげくに所を走つた噂、此の大和は生國なれば、十七軒の飛脚屋仲間、お上からも隱し目附、或は順禮古手買、節季候に迄身をやつし、此在所は詮議最中、誰ゆゑなれば其

の傾城の嫁御故、近比愚痴な事なれど、世のたとへにもいふ通り、盗する子は憎うなふて、縄かける人が恨めしいとは此事、久離切た親子なれば、よからふが悪からふが、構はぬ事とは思へ共、大阪へ養子に行て、利發で器用で身をもつて、身代もよふ仕上げた、あの様な子を勘當した親は大きなたわけ者と、指さしられ笑はれたら、其嬉しさはどう有ふ、今にもつい捜し出され、縄かゝつて引るゝ時、孫右衛門は目水晶、よふ勘當した出かしたと、譽られるのが悲しうござる、それを思へば一日も早う往生おすくひと、拜み願ふは今まゐる如來様御開山、コレマ佛に嘘がつかれふか』

と、どふとひれ伏しもだゑ泣。梅川も聲を上げ、忠兵衛は障子より手先を出し伏拜み身をもみ歎くぞ道理なる。猶も涙を押拭ひ、

『様子聞かぬかしらぬが、子を釣出さふとお上の斗ひ、養ひ親の妙閑殿、一昨日牢へ入られたがな』

『ェ、』と夫婦は氣もうろ〳〵、

『それでつく〳〵思ふには、實の親を便にして、もしも忍んで來はせまいか、來たらば何ぼう不便でも養子親への義理有れば、かくまふ事は扨置いて親が縄かけ出さねばならぬ、ァ、どうぞ來てくれねばよいが爰らあたりをまいつきはせまいか

と、四年以來逢ひもせず、なつかしい子の顔を、見ぬやうに〳〵と、雜行ながら神たゝきも不便さから、ァとはいふ物の、若死するも人の一生、義理有る親を牢へ入れ、おめ〳〵と逃隱れは末世末代不孝の惡名、所詮遁れぬ命なら一日なりと妙閑殿を早う牢から出すのが孝行、覺悟極めて名乘つて出い、シタガそれもどうぞ親の目にかゝらぬ所で繩かゝつてくれ、ェヽ現在血を分けた子に早ふ死ねと敎へるも浮世の義理か是非もなや、なぜ前方に內證で斯〳〵した傾城に斯した譯で金が入ると便宜でもしをつたら久離切ても親子じや物、隱居の田地を賣立てゝも首繩はかけまいに、みなあいつが心から、其身もせまい苦をしをつて、いとしぼなげに嫁御に迄、思ひも寄らぬ憂目を見せ、知音近附親に迄隱れる樣に身を持なし、ろくな死もせぬやうに此親はうみ付けぬ、憎いやつじやと思へどもかはゆふござる』と泣しづみ、わけたる血筋ぞ哀れなる。　涙の隙に巾着より金一包取出し、

『是は京の御本寺樣へ上ふと思ふた金なれど、嫁と思ふてやるではない只今のお禮の爲、是を路銀にちつとなと遠い所へ往て下され』と、渡せば梅川押いたゞき、

『お心付た此お金逆樣ながら戴きます、大阪を立退ても私が姿目に立てば借竹輿に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶や、五

日三日夜を明し、廿日餘りに四十兩つかひ果して二歩殘る、金故大事の忠兵衛様、科人にしたも私から嘸憎からふお腹も立たふが、因果づくと諦めて、お赦しなされて下さりませ、親子は一世の縁とやら、此世のわかれにたつた一日逢ふて進ぜて下さんせ』と、奥の障子を明るを引留め、

『アヽコレ益體もない〳〵、たつた今もいふ通り、譬へ詞はかはさいでも、顔見合したりや繩かけるか、おれが口から訴人せにや養ひ親への義理が立たぬ、何ぼ義理が立てたい迚、親の手づからどう繩がかけられふぞいの』

『御尤でござります〳〵、そんなら顔を見ぬ様に』と、傍に有合ふ手拭取り、泣〳〵後に立迫り、慮外ながらとめんない千鳥、

『御不自由には有ろが斯さへすればそばにござつても構ひは有るまい』

『オヽ忝なふござる〳〵、物言はずと顔見ずと手先へなと觸つたらそれが本望逢ふた心、親子一世の暇乞、必ずこなたの連合に物いはして下さるな』と、悅ぶ中に忠兵衛は嬉しさ餘りかけ出て、親子手に手を取かはせど、互に親共我子共言ずいはれぬ世の義理は、涙涌出る水上と身も浮く斗に泣かこつ。折から聞ゆる多くの人音、二人を奥へとつきやり〳〵、

『コレ〳〵女中、あの物音は慥に捕人、此裏道の小河を渡り藪

をぬければ御所街道、早ふ〳〵』と氣をもむ所へ順禮すがたの八右衛門、利平もともに蚤取眼、役人大勢打つれ立ち、此内がきぶさいなと、どか〳〵と込入る所へ組子一人かけ來り、『所は長谷の山つゞきに梅川忠兵衛と名乘る者、休みをつたを追取まき、からめとらんといたせ共中々手に合ひ申さず』と、聞くより小頭扨こそ〳〵、來れつゞけと引かへせば、二人も俱に飛で行く、孫右衛門は飛立つ嬉しさ、天の助けかゝたじけないと、裏道見やつて延あがり、

『オヽさうじや〳〵其道じや、ソレ其藪をくゞるなら、切株で足つくな』と、届かぬ聲も子を思ふ平沙の善知鳥血のなみだ、長き親子のわかれには、安かたならでやすき氣も、涙々の浮世なり。

新口村の段註釋

〔節季候〕　せきぞろと讀む。「節季にて候」の意。昔は歳末になると「セキゾロ」といふ乞食が來て、戸毎に米錢を貰つて歩いた。大抵二三人揃つて來る。いづれも頭には編んだ頭巾を被り、松竹梅等を畫いた紙の前垂を掛け、小太鼓を打ち、さゝらを摩つたり何かして、せきぞろ〳〵と云ひながら歌つたり踊つたりする。「節季候たい〳〵」とは節季候だ〳〵といふ事。

〔通らしやれ〕　通つてくれと云つて物貰ひを斷るのである。御無用などいふのと同じ。

〔親方衆〕　旦那方。又は旦那衆といふに同じ。身分及び財產の己らより優りたる者を指していふ。「親方衆と達ふてこちとらは水呑百姓」。

〔つこど〕　つッけんどん。邪慳。「つこどに云れ」。

〔絲車〕　絲より車の略。綿より絲を紡ぎ出し、または紡ぎたる絲を撚り合せる道具。

〔納戸〕　衣服や道具を藏つて置く部屋。

〔おうへ〕　お上の義か、座敷。「おうへの塵掃出す表へ」。

〔てい〕　別に意味のない呼び聲。「てい古手買紙屑、お内儀樣紙屑はないかな」

〔お内儀〕　他の細君に對する敬稱。おかみさん。

〔在所〕　田舍。鄕里または故鄕のことを在所と云つたのが轉じて田舍のことを在所といふやうになつた。

〔同行〕　連れ立ちて行くこと。同じ道の修行者。

〔ふだらく〕　印度の西南にある地名。觀世音菩薩の住所と言ひ傳へられてゐる。

〔三熊野〕　熊野三山のこと。本宮、新宮、那智。紀州の名所。

〔那智のおやまの詮議〕　那智のお山とオヤマ（遊女）とを懸けてある。梅川は遊女であるから、その梅川と駈落した忠兵衛の行方を詮索してゐるので、「おやまの詮議」と云つたのである。

那智のお山は西國三十三觀世音第一番の札所。

〔白木綿〕　順禮は白い衣服を着てゐるので白木綿と云つたので、これも例の懸け詞で、「人目にそれと白木綿」とは人目にも直ぐ知れるといふ意味。

〔おひずる〕　本文には禪衣と書いて「おひずる」と讀ましてあるが、これは間違つた宛て字である。笈摺は笈を負ふ時に肩にあてる布のことであるが、また順禮の着る袖無しを笈摺といふ。

〔手の内〕　寸志。錢を少し惠んでやること。「手の内も法度でござんす」この村では順禮に寸志をやる事も禁められて居ります。

〔けんどん〕　慳貪。むごいこと。邪慳。苛酷なこと。「アヽけんどんな在所だな」。

〔落人の爲かや〕　落人は薄の動くのを見ても人が來たのではないかと思つて恂々するものであるが、今は冬枯で薄も尾花もないけれど、誰かに見付りはしないかと思つてオド〳〵して歩いてゐるといふこと。

〔足曳の〕　あしびきは山の枕言葉。山の裾の長く曳いてゐるのを表はした言葉である。例「足曳の山鳥の尾のしだり尾のなが〳〵し夜をひとりかも寢ん」。本文の通り「石原道を足曳の大和は爰ぞ故郷の」とあつて、大和へ懸けてあるので、大和は山でないが、こゝでは枕詞のやうな形になつてゐる。旅馴れない身であるから草臥れて足を曳ずりながら、石原道を歩いて來たが、こゝはもう大和の國で、自分の生れ故郷であるといふ。

〔庄屋〕　德川時代に領主が其の領地の土着民の中より相當の人物を拔いて、一村または數村の事を統轄せしめた代官。名主。

〔傾城〕　遊女。「漢書」に「一顧、人の城を傾け、再顧、人の國を傾く」といふ語がある。美人のことを云つたのである。後、轉じて遊女のことを傾城といふやうになつた。

〔けいせん〕　忠三郎の家内は田舍者であるから傾城を訛つて「けいせん」と云つたのである。

〔代官所〕　代官の役所。明治以後の郡役所のやうな役所。代官といふのは武家時代の地方官で、その司配地内の年貢、公事または人別等の事務を扱ふ。

〔久離切る〕　縁を絶つこと。勘當すること。尊長の意に逆らひて放逐されること。正當の手續を經て屆出をするのであるから、一旦受理された上は法律上の責任は一切親元の方には係つて來ないといふ掟であつた。

〔年籠の參宮〕　年の暮に社に籠り、元朝に拜すること。參宮は伊勢參宮のこと。

〔一かへり〕　一返。「一かへり行てきませう」といふのは一寸行つてまゐりませうと云ふこと。

〔京のお寺〕　本願寺。

〔道場〕　佛道を修める處。「京のお寺が鎌田村の道場へお下り」といふのは鎌田村のお寺へ門跡樣が御出張になつたといふこと。

〔先から直ぐに〕　出先から直ぐにお寺へ廻つたかも知れない。

〔西受〕　西日を受るといふ意味、西向のこと。「奥の一間は西受の」。

〔阿彌陀傘〕　傘を平らに差さず、後へ落して差すこと。帽子を阿彌陀に被るなどいふ。「うしろしぶきの吹雪にはかたげて急ぐ阿彌陀傘」。

〔置頭巾〕　丸頭巾に同じ。丸く仕立てた頭巾。

〔嶋原〕　京都六條朱雀の東にある名高い遊廓。

〔錢百〕　昔は男女とも九十歳になると官より錢百文を賜はるのが例であつた。

〔鍼立〕　はりたて。鍼醫。

〔綟子の肩衣〕　もぢりとは麻糸を綟りて目を荒く織りたる布。肩衣とは袖無のこと、ちやんちやんこ。

〔野口〕　畑の端。「野口の溝の薄氷」。

〔連合〕　つれあひ。夫。

〔飛脚屋〕　手紙又は爲替などを預かつて各地に往復して所用を辨ずることを營業とする者。

〔隠し目附〕　變裝して犯罪者を搜し歩く下級の役人。探偵。

〔目水晶〕　目が水晶のやうに澄んでゐる。目が能く利くといふ意味。

〔往生おすくひ〕　往生とは一心に念佛修行をして阿彌陀の力によりて現世を去り淨土に生るゝこと。「往生おすくひ」とは阿彌陀のお助けによつて往生すること。

〔御開山〕　本願寺の開祖。親鸞上人。

〔まひつき〕　うろ〳〵と迷ひ歩くこと。「こゝらあたりをまひつきはせまひかと」。

〔雜行〕　ざふぎやう。一向宗は彌陀專念である故、他の宗旨に歸依するのを雜行と云つて異端視する。孫右衛門は忠兵衛の無事を祈るために神詣をしたので雜行と云つたのである。「雜行ながら神たゝさも不便さから」。

〔神たゝき〕　神樣にお願すること。

〔便宜〕　たより。知らせ。「便宜でもしをつたら」。

〔いとしぼなげ〕　しほ〳〵して哀れげなること。

〔知音〕　ちいん。知人。「知音近附親にまで」。

〔京の御本寺樣〕　本願寺。門跡樣。

〔釜體もない〕　埒もない。

〔めんない千鳥〕　目隱しをして捕まへッこする子供の遊戯。

〔御所街道〕　大和の南葛城郡御所といふ地に通ずる街道。

〔氣ぶさいな〕　怪しいぞ。

〔組子〕　捕吏。取手。犯人を捕まへる下級の役人。

〔善知鳥〕　うとうどり。大さ小鴨ぐらゐの水禽、翅の色は淡黑く、頭に白い飾毛が生えてゐる、それは丁度髭のやうに見える。頸長く、嘴の本に赤い瘤あり、先が尖つてゐる。北海

の濱邊に產す。この鳥は海濱の砂の中に兒を生む。餌を與へる時に空からトウと鳴く、すると子鳥は沙の中からヤスカタと答へるといふ。もし其の子鳥を捕へんとすると、空から血の雨を降らすと云はれてゐる。「平沙」は砂地のこと。昔は奥州の外ケ濱に棲む鳥であると云はれてゐた。

「安かたならで」　ヤスカタと泣く善知鳥ではないが、孫右衛門は心配で〳〵耐らないといふ意味。「安かたならでやすき氣も」。

解説附
稽古本

義太夫名曲全集

傾城戀飛脚

解題

大和の新口村の百姓孫右衛門の倅忠兵衛は大阪の飛脚問屋鳥屋といふ家へ養子に貰はれて行つたが、資性才氣が有つて商ひの道にも敏く、人受は好し、身持も固い所からして、おすはと云ふ娘を妻はせる事にして、姑に隱居をして妙閑と名を更めた處、不圖した緣で堤屋の梅川といふ傾城に馴染んだ揚句、西國から廻つて來た金包の封を切つたのでお尋ね者になり、兎ても助からぬ命で有るが、せめて生の親に暇乞を爲よはうと云ふので二人手に手を執つて鄕里へ歸つて來るといふ筋である。

近松門左衛門の「冥途の飛脚」を菅專助と竹笛躬とで改作したものである。

雪がチラ〳〵落ちて來ました。田舍道は寒さうであります。もう年の暮で田舍は何處の家も忙がしうございます。こゝは大和の新口村といふ所で、あすこに見へる小さな百姓家は忠三郎夫婦の住居で、村の小作をしてゐる水呑百姓であります。いづれ御多聞に洩れない貧乏人では有りますが、夫婦とも正直で能く稼ぎますから、その家庭は毎も平和で圓滿であります。

何だか變な奴が來ましたネ。二人連で來ました。あれは乞食ですか。左樣、乞食です、節季候といふ乞食です。頭に頭巾を被つて前垂を掛けてゐます、前垂には松竹梅の繪が畫いてある。乞食共は小さな太鼓を叩き、鮠を摩りながら「節季ぞろたい、節季ぞろたい」と云つて、妙ちきりんな歌を唄ひながら踊る。「節季ぞろ」とは節季にて候ふといふことです。あゝして門に立つては物を貰つて歩くのです。お鼻は腹を立てゝ、「宅のやうな貧乏人の處へ來たつて何にも出やしないよ、行つておくれ〳〵」と、けんもホロゝに追ッ拂つてしまひます。

オヤ、今度は紙屑買が來ましたよ。此邊では紙屑買の事を古手買と云ひます。「お内儀さん、何ぞお拂ひ物はございませんか」『何です、お拂ひ物だつて。エ、紙屑？　そんな物は町へ行つてお買ひなさい、田舍ぢやア塵ッ端一つだつて無駄には爲ませんよ、お前さんは田舍の樣子を知らないんだらう、ほんとに何といふ頓痴氣なんだらう」頭ごなしに爲れてコソ〳〵行つてしまひます。成程さうだ、田舍へ紙屑を買ひに來たつて仕樣がない。今日は餘ッ程變な日で、胡散くさい奴ばかり遣つて來るのでした。それも其の筈、皆な大阪から來た廻し者で、乞食でも紙屑買でも無い、いづれも十手と捕縄を持つた怖い小父さん達です。

お鼻は何かブツ〳〵いひながら其處らを片附け、座敷を掃除して、そろ〳〵夕飯の支度に掛らうとしてゐると、チリン〳〵といふ鈴の音、同行二人、例の札所廻りが遣つて來ました。この巡禮たちも矢張大阪から來た廻し者に違ひ有りません。厭にキョト〳〵して其處いら中見廻してばかり居りますよ。「ふだらくや岸打つ波は三熊野の」と下手な御詠歌を唄ひかけると、「出ませんよ」と頭から劍突、「この村では一切御報謝は法度ですよ」『へエー、大層因業な村ですナ

ア。それでは一服頂きます』『イエ、煙草の火を貸すことも成りません』順禮は呆れ返つて行つてしまひます。

若い綺麗な男と若い綺麗な女と二人連で、後になり前になり、早や暮れかゝつた畦道をトボ〳〵と遣つてまゐります。若い男は忠兵衛さんで、若い女は梅川であります。こゝで一寸二人の身の上を話す必要がある。

忠兵衛は此村の百姓で孫右衛門といふ人の倅ですが、大阪の飛脚問屋で龜屋といふ家の養子にやられたのです。飛脚屋と云ふのは諸國への文通や金の受渡しや爲替其他の傳達を扱ふ職業で、相當の財産と信用とが無ければ出來ません。先づ今日の銀行と郵便事務の一部を兼たやうな商賣であります。その當時大阪には十八軒の飛脚問屋があつて、龜屋も其の十八軒の一つであります。忠兵衛は根が悧巧者で、人好も善く、萬事に拔け目なく働きますので身代をそつくり讓り受けて、姑は隱居をして妙閑と號し、茶ノ湯活花に世事を忘れ、店の內外何も彼も忠兵衛一人で取仕切つて居りましたが、不圖した事から魔が魅しまして、つひには身の置き處がないやうになりました。

梅川は京都の生れで、數珠屋町といふ所に兩親が居ります。いづれ曲輪へ身を賣る程の者に不仕合せでない者は有りません。梅川も親兄弟のために苦界へ身を沈めたのでありますが、槌屋の店では全盛を張つて居りますと、不圖した緣で忠兵衛と馴染めまして、だん〳〵深間になるに連れてお定まりの金に詰つた所へ、八右衛門といふ競爭者が現はれて來ました。此奴金廻りの好い處から無理にも身請を爲ようとします。サア二人は氣が氣ではありません、と云つて最早融通の路は止つて居りますから他に工面の仕やうも有りません。ある日、八右衛門らと一座になりました時、忠兵衛の足元に附け込んで散々愚弄致しましたものですから、つい口惜しまぎれに、懷にあつた金包の封を切つて了ひました。その金で梅川を請出して、呆れ返つてゐる八右衛門らを尻目にかけ、二人は手に手を取つて店を出てしまひました。併しその金は西

國から廻つて來た預り金で、其時分の掟によれば封印切は中々罪が重うございますから、何の途生命は無いのでございます。

京都の數珠屋町へも手が廻つて、梅川の駈落した事が知れましたから兩親はどんなに驚いたか知れません。養母妙閑は忠兵衛の行方が知れるまで假牢を仰付けられました。これは忠兵衛を釣出さふといふ策なのです。誠にハヤ氣の毒千萬な話で。

無論、忠兵衛の郷里へも此の風評は傳はりました。併し孫右衛門とは緣が切れて居りますから別にお咎めは有りませんけれど、生れ故郷でありますから屹度尋ねて來るに違ひない、もし見當つたら早速代官まで訴へて出るようにと云ふお觸れが出て、村中の寄合があるやら何やら、此の忙がしいのにごたッ反して居ります。忠三郎も其の寄合へ出かけたのであります。

忠三郎と忠兵衛とは子供の時分からの友達で、大の仲好しでありますから、それを頼りに遣つて參つたので、どの途捨る命なら生れ故郷へ歸つて其處の土になりたいと思つてゐるのでございます。併し此處まで來る途中の恐かつたこと！　今にも見付けられやしないかと思つて恟々しながら、疲れた足を引ずり〳〵漸とのことで新口村まで辿り着いた處であります。

見馴れない人が若い女子を連れて尋ねて來たので、內儀さんは不思議に思ひました。この內儀さんは他處の人で、こゝへ嫁いて來たのも爾う古い事でありませんから、忠兵衛の顏は知つて居りません、「良人は村の寄合へ出かけて留守でございます。それに京の門跡樣が村のお寺へお下りになつたので、ひよッとすると出先からお寺の方へ廻るかも知れません」といふ。「それは困つたナ。實はお伊勢樣へお籠りを仕に出て來たのですが、久しく逢はないから一寸寄つて見たのです。お氣の毒だが呼んで來てくれませんか、ナニ友達が來たと云へば分ります」「それでは一走り行つて來ませう」と心安げに出て行きました。出て行く時に、「御飯が仕掛けてあるから氣を付けてお呉んなさいよ」

梅川は心配で成りません、かう詮議が嚴しくなつてゐるのに、浮かり此處らには居られまい

と云ふ。なに、忠三郎は至つて俠氣な人物だから其樣な心配はない。今夜一晩泊めて貰つて、餘處ながらお父さんへ暇乞を爲ようと云つてなだめて居りました。

二人の隱れてゐる部屋は西向なので、戸外が瞭乎と能く見へます。障子の孔から覗いて見てゐると、お說教が果てたと見へて、村の老人たちがゾロ〳〵歸つて來ます。野路で雪が吹ッ掛けるものですから皆な傘を阿彌陀に差して居ります。その中に孫右衛門が居りました。皆なの跡からトボ〳〵歩いて參ります。もう可なりの年輩で足元も何うやら危つかしく思はれます。忠兵衛は遠くから見付けまして、「アレ〳〵あすこへ來るのがお父さんだよ」と云つて指さしました。梅川は其の指さゝれた方を覗いて見ました。あれが舅さんの孫右衛門さんか、成程忠兵衛さんに面ざしが似てゐる、あゝ愛しい舅さんではある、併しこれが逢ひ初めの逢ひ終ひであると思ふと耐らなく悲しい。良人も定め逢ひたからうと思ふと涙が止め途なく出ます。

路は此家の前を通つて居りますので、孫右衛門はつひ其處まで來ましたが、水溜りへ下駄を反してドサリと横ッ倒しになりましたから、梅川は慌てゝ駈出して行きまして、いろ〳〵面倒を見てやりました。孫右衛門は丁寧に禮を述べて其の深切を喜びましたが、此處らに見受けない女では有るし、風俗が全然違つて居りますから、さては此女が梅川であるなと感づきまして、いづれ其邊に忠兵衛めが居るのであらうが、こゝへ顏を出すことも出來ない始末である、不孝な奴だと思ふと腹が立つやら可愛想やらで、愚痴を並べます。この忠兵衛さんを不身持にしたのも原は自分ゆゑだと思ひますと、梅川は舅さんに對して氣の毒でなりません。それを家の中で聞いてゐた忠兵衛は、障子の破れから兩手を出して泣きながら拜みました。

梅川は何うにかして此の親子を逢はしてやりたいと思つて、孫右衛門にせがみました。孫右衛門も我子に逢ひたい事は山々でありますが、龜屋の隱居に對しての義理が有りますから、手拭で目隱しをして貰つて、無言のまゝ、親子手に手を握つて涙に咽びました。

其時多勢の人の足音がしましたので、早く隱れろと云つて二人を家の中へ追込みました。果

して捕方が向つたのです。然も執念深く八右衛門まで一緒になつて搜し歩いてゐるのです。何うも此處の家が怪しいと云つてドカ〳〵踏込みさうにしましたから、孫右衛門は思はず念佛を唱へました。其時一人の組方が飛んで來まして、今、彼方の山の中で梅川、忠兵衛の二人を見付けて遁さないやうに取卷いたは取卷いたが、此奴思ひの外手剛い奴で持餘してゐるから早く來てくれと云ふ。「それ！」といふので一同は飛んで行きました。「此間に早く早く」と焦りながら孫右衛門は抜け道を敎へてやります。二人は名殘を惜み惜み慌てゝ遁げて行きます。それは其れとして今、山の中で見付けられたと云ふ梅川と忠兵衛とは一體何人でせうか。これは說明するまでも無い、忠三郎夫婦でありました。二人は身代りとなつて、たとへ少しの間なりとも命を延してやりたいと思つたのであります。然し忠三郎夫婦の深切も其の效なく、梅川と忠兵衛とは間もなく捕まつて了ひました。忠兵衛は牢へ入つてから十日目に死んだといふ說であります。梅川は只だお咎めだけで濟みました。

（をはり）

昭和五年十月三十日印刷
昭和五年十一月十二日發行

解說　傾城戀飛脚

編者　玉井清文堂編輯部

發行者　東京市神田區表神保町十番地
發兼印刷者　玉井清五郎

發行所　東京市神田區表神保町一〇
電話神田二三三三番
振替東京三二八番
玉井清文堂

不許複製

【清文堂印刷部印行】

終